

12 江戸期本草家の北陸への関心 (二)

畔田翠山の白山・立山紀行

正橋 剛 二

前回(一九九七年)福岡市では同じ演題で山本溪山(一八二七—一九〇三)の『入越日記』(一八五一年成立)を取上げたが、今回は紀州和歌山藩医、本草家畔田翠山(一七九二—一八五九)の夥しい著作(推定五七部三三二卷)のうち、標題に関連する次の五書を取上げる。すなわち、

- (1) 『白山の記』(文政五年、三五丁)
- (2) 『白山草木志』(同年、上二〇丁、下一二丁)
- (3) 『立山草木志』(推定同年、上のみ一七丁)
- (4) 『北越卉牒』(未詳、上五四丁、下五一丁)
- (5) 『北越物産附図』(未詳、一七丁)

(カッコ内は成立の年と紙数を示す)

右の(1)(2)は表裏一体のもので、文政五年六月、三一歳の翠山は福井から勝山を経て白山に登った。(1)はその紀行

文で、風物のスケッチ(一六図)とともに優れた山岳誌をなす。(2)はその採葉記録で草五九種、苔三種、木二八種計九〇種を収めた貴重な記録となっている。(ただし付図はない。なお右二書はすでに公刊されている)

白山の後翠山は越中立山へ登り、(3)はその記録である。目録には二七品目を挙げるが、本文にはこれ以外の品を含めて三八品目を記し、付図一八を添えている。現在の立山で見ることのできる水芭蕉、ワタスゲ、トウヤクリンドウ、チングルマ、シオガマ、コバイケイソウ、ハイマツ、ツガザクラ、雷鳥などを紹介している。(3)の内題は「立山草木志上」とあるが、下巻の存在は知られていない。また、上巻々末は立山の硫黄・温泉に及んでいるので、当時翠山の用いた分類・記述順ではそれなりの完結と見られ、当初の予定を変え、上巻のみで脱稿したと見るのが自然であろう。

(4)と(5)の成立年代は決定できないが、内容は(2)(3)を遙かに超え、飛躍的に増強されている。すなわち、(4)の上巻五四丁は草類にあてられ、一二九種と五九図、下巻は蔓草、苔、穀菜瓜、木の小計九九種のほか、禽、獸、虫、

魚、介、金石、水火、飲食まで五一種で計一五〇種三五図（上下二巻の計二七九種九四図）となっている。なお、翠山は下巻でツグミを引合いに出して雷鳥を記述するが、雷鳥の図もツグミに似て、とても雷鳥には見えない。

最後の(5)は目次も付図も欠くが、内容には一応の区分があり、草五四種、穀菜一二種、木三八種、雑二九種の計六七種が収録されている。書名には(4)との一貫性を欠く憾みを残すが、(4)をさらに追補する意図のもとに編集された、と考えざるを得なかった。

次の点に留意して、右記五書を通覧すると、これらの成立の過程が推論された。すなわち、

(一)収録品目数と紙数——(2)は九〇種、(3)は三八種に過ぎなかったが、(4)では以上に上乘せて新たに魚・介などを含めたので前記の通り、内容は二倍以上にふえ、さらにその後(5)が追補された。当然ながら紙数も大幅に増した。

(二)採取地域の拡大——(2)と(3)は白山と立山に限られたのは当然として、(4)では越前や越後での品目が加わり、とくに(5)には越前の品目が多くなっている。

(三)個々の品目の記述の精粗——(4)(5)では品目がふえたのみならず、個々の記述内容が他面的となり、各地域での状況を同時に併記するようになる。ただしこの際、チングルマを例にとると、(3)では「立山御田原二多シ」とあったのが、(4)では「立山白山頂上二多シ」と変化し、ややもすれば採取地が山頂へと移行する傾向が散見された。歳月の経過とともに、ややもすれば印象が強かった山頂へと採取地が移るものようである。

以上をまとめると、取上げた一連の書物の最初の三冊はよりフィールドワークに近く成立し、後二者(4)(5)はよりデスクワークの特長を示していた。旧来の薬用植物を中心に始まった本草学が、次第にその有用性を離れ、地域的な動植物の分布状況を中心においた博物学へと発展し、その志向の強かった翠山が自己の調査を集成して行く経過をうかがうことができるものであった。

(関)白雲会眞羽神経サナトリウム